

(“The origins of Parliament”) は殆んど完全に抑壓され十七世紀に於ては如何なる人もそれを目にした様には思はれぬ。一般に國會學派の學説が徐々に堅實強化されたに反して、その反對者側の意見は決して一の全體へと融合しはしなかつたのであつて各々の獨立した批判は彼自身の保全と偏見から出發してゐるものに過ぎなかつたのであつた。

右の様に Evans は此の小論に於て國會に關しての Elizabeth 及び初期 Stuart の數個の見解を簡單に記述してゐるに過ぎないのであるが、この英國會發展史上最も注目さるべき時期に於ける種々なる見解はその歴史的背景を如實に浮び出ださしめる事に於て吾々に一層の興味を興へるものである。その意味に於てこの小論は英政治史に關心を有する人々に取つて價値ある手引書の一たるを失はぬであらう。(“History” Dec. 1933. [Vol. XXIII, no. 91] p. 206 ff.) (笹川新一)

### ソヴェエトの極地經營

——ソヴェエト北進の歴史的・經濟的、  
並びに政治的研究——

T・A・タラクチオ

Taracuzio, T. A.; Soviets in the Arctic.  
An historical, economical and political study  
of the Soviet advance into the Arctic.

世界的には國際問題、思想問題の喧しく、吾國に於いては更に

紹介

聖戰最中の今日多大なる未來を姪む極地ソヴェエトに關して本書が出た事は誠に適切なものと言へよう。

本書に就いては既にジオグラフィカル、ジャーナル(一九三九年四月)にも紹介があるが、著者タラクチオはエストニアに生れ、レンングラード大學に四年遊んだ米國人で、目下ハーバード大學でスラヴに關する資料蒐集をなし、既に「ソヴェエト聯邦と國際法」の著書をも公にしてゐる。先づ簡單にこの書物の構成を示すと

第一章	極地ソヴェエトの地理	三九頁
第二章	一九一七年以前の探險	三二頁
第三章	ソヴェエトの極地探險	六八頁
第四章	極地ソヴェエトの經濟的發展	一一一頁
第五章	社會・文化の再建設	六三頁
第六章	國際的意義	五二頁
附 錄	三四項目	一七頁
文 獻		四六頁
索 引		一四頁
地 圖		七葉

第一章では先づ「極地」の範圍について從來の諸説を批判し、一九二六年そのいづれでもない扇形學説を政治區劃に採用した事から始まつてゐる。即ち「極地ソヴェエト」とは、ウラル山脈以東はベーリング海峡に到る北緯六二度の北、ウラル山脈以西はムル

第二十四卷 第三號 一五三

マンスクに到る海岸線より北、北極に到る扇形の全區域を指すのである。この範圍にある陸地のみでも北米合衆國に相當し、その潛勢力は計り知れないのである。この章では更にこの地域の大陸・氣候・航行の可能性に就いて述べ、東部海洋では八、九月に辛うじて船を通し得、西行には木材を、東行には魚を運び得る状態に到つた事を述べてゐる。

第二章では、一九一七年、即ちソヴィエト革命の年迄の他國人及び自國人の探險を、地域別、方法別に述べ、總じて之等は研究よりも好奇心、名譽心に發すると云ふ。

第三章では、極地ソヴィエトを完全にソヴィエト化し、經濟的には新資源を開發・發見する事がソヴィエト自身の探險の目的であるとし、この目的の爲には寧ろ國家全體が參與し、且つ必ず科學者が同行してゐる事は、既に探險が全くルーチンに行はれてゐる事と共にソヴィエトの探險の特徴であると述べてゐる。紹介者は嘗て「チェリュースキン號の最後」なる映畫に同國探險隊の科學的色彩と國家的背景を強く印象され、羨望の念に堪へなかつたが、本書によりその惑々事實なる事を知つたのである。この章は更に地域と探險方法に依つて區分し、詳細を極めてゐる。

第四章は運輸及交通と工業の二節に分れ、前節では特に、航空機が偵察にも、運搬にも、その他各種の仕事にも全く缺き得ない事をも述べ、後節では石炭・石油・金・銅・鐵・岩鹽・泥炭・石墨等の礦産、それから林業・皮革業・漁業・農業等について種々新しい事を詳らかにしてゐる。但しそれらの統計類はいづれもソ

ヴィエトのもの故、果してどの程度迄信頼すべきかは尙ほ殘る問題であらう。

第五章は、住民・政策・文化を語り。

第六章では、極地ソヴィエトの意義を、非政治的展望、政治的反映、管轄區域の三つに大別して、前者にはソヴィエトの第二極年への參加、ノビレ少將の救助、氣象觀測、北氷洋の地圖學等の例をあげて非政治的な國際的意義を強調せんとしてゐる。併し、元來極地ソヴィエトは政治的に考ふべきであり、そこには未だ將來の問題ではあるが土著民の獨立要求、或は、ソヴィエト以外の低文化地へ蘇文化を擴張せんとする問題が起るに違ないと云ひ、戰略的には北氷洋に交通の開けた折は唯、日本を恐畏させるには止らなると斷じてゐる。最後に再び極地統轄に關して前述の扇形區學說を詳論し、結論に到つてゐる。

本書は多數の附録、文獻を記載する點からも相當公平であり、科學的である事が想像されるが、讀んで行く間に特に或る傾向を感ずる事もなく、極地ソヴィエトに關しては最もよい參考書、一般書であると云ふも過評ではないと思ふ。書中諸所に散見する「潛在的」の字は將來の發展を見越しての著者の用意であり、これある事は吾國として今より周到の注意を拂ふべき問題の存在を示唆するのである。(New York, Macmillan, 1938, ¥26.25.)

〔淺井〕

## フィリピン群島

### キーシング著

Keesing, Felix M.: The Philippines.

A nation in the making.

獨立途上にある比島が、一九三五年に到つては更に拍車を加へ、現今の急激な世界秩序改造の最中に於て、兎も角も一應落着いた獨立準備國として來る一九四五年の完全なる獨立を待機して居る事は周知の事實である。

比島の獨立問題が、米國人をして甚しきディレンマに陥らしめる事は事實であるが之あるが爲に米國人間に於て其の獨立に對する賛成派と反對派との對立が一層甚しきを加へたのも當然であらう。著者はハワイ大學人類學教授大平洋諸島人類學民俗學の權威として聽えて居る。彼が比島獨立に對して同情的立場を持するは、フィリピノの社會性・民族性を基礎的に認識せる爲と云ひ得るかも知れない。著書は著者が Institute of Pacific Relations の主催の下に調査した所を基として居るのであつて、比島の住民を中心として此の側より比島全體を鳥瞰し、簡単に纏め上げた謂はばハンドブック的のものである。従つて比島の科學的分析と云ふよりも著者一流の民族なるものに對する同情と愛着によつて一貫せられて居る。即ち著者は内容を十六項に分ち、比島人の現在に於る生活様式、地理的環境(地形・面積・人口・動植物・生産物等)の概観的序述に基を起し、續いて人種學上より現フィリピン人所

謂フィリピンを分解し、次に之に働かかけて四百年間支配したるスペイン人を歴史的に回顧し、其文化の現フィリピン社會に及ぼせる影響と遺産、現今に於る住民の主要職業たる農業の小作制度・商工業・フィリピノの美術・文學作品等に到るまで言及し、政治的獨立問題と、フィリピン民族なるものの完成への歩みとを結びつけて結論として居る。故に本書は單に地歴民俗的科學書でもなければ文學的政治的著書でもない。將來に於て完成さるべきフィリピン民族國家を理想とする思想的隨筆とでも云ひ得て過言ではあるまい。従つて科學的系統的敘述は爲されずして、英米人にある勝ちな通俗的敘述が行はれて居る爲、科學的正確さを期待する讀者をして物足りなさを感ぜしむるの缺點なしとしない。

第十六章に於て「現今に於ては、教育されたるフィリピンは東洋の隣人に對して何らの熱情と魅力を示さないであらう。例へば彼等の日本に對する態度は普通のアメリカ人の其れに似たものであらう」と説いて居るのを見れば、東洋人としてのフィリピノの獨立を念じて居る著者にも避け難い矛盾であつたのであらう。著者の意圖する所が那邊に存在するとしても、讀者が現代に生る日本人である限り、パシフィック海峽を隔てて臺灣の眞南に存在する此の隣國群島は忘れ得可からざるものであり、吾が智識人の一讀するに手頃の書なるを信ずる。

尚最後に比島の年代記及び比島に關する參考書一覽表が附加せられて居る。(四六例、本文一三三頁、圖版六、寫眞二五、オックスフォード大學出版)〔淺井〕